

(別紙2)

## 論文審査の結果の要旨

氏名： 大崎 さやの(おおさき さやの)

論文「ゴルドーニの演劇改革・ 同時代人の批評を通して」は、18世紀イタリアの喜劇作家カルロ・ゴルドーニ(1707年生-1793年歿)が自己の創作活動の重大な課題とした演劇改革を主題とし、ゴルドーニに先立つ演劇改革の試みから説き起こし(第1章)、ゴルドーニ自身の改革理念を史料に基づきながら確定し(第2章)、この改革が舞台の上で実際に行なわれる興行活動としてはどのように推し進められていったかを、1748年から52年までのサンタンジェロ劇場時代(第3章)、1753年から62年までのサン・ルーカ劇場時代(第4章)と年代的に跡づけている。読まれることのみを目的とするのではなく、上演されることを目指した作品の場合、理念の実現は、役者集団の意識、聴衆の文化度・教養、文化の新たな流行・潮流、実際の興行成績およびそれに影響を及ぼす批評家らの動き等にさまざまな度合で左右され、それらと多かれ少なかれ妥協を強いられることになるが、これらの要素を積極的に視野に取り入れ、広範な史料を駆使しながら、演劇改革の理念とその実現形態を時系列的に明確に把握した点が大崎論文の最大の長所である。

ただし、イタリアの演劇改革をめぐる先行研究を総括し、自己の立場を明確にするために有機的に組み込む点では、いまだ不徹底さを残している。また、史料の読みの正確さの点では、まだ改善すべき箇所が散見される。時系列的なアプローチの結果、個々の作品に割り充てられるべきスペースが減り、十分に面白みが引きだされなかった憾みがある。しかし、この最後の点は別のアプローチの論文において補完されるものであろうし、複雑な現実のしがらみの中で進行していったゴルドーニの演劇改革を明晰に描きだした点は大きく評価できる。その記述は堅実な礎石であり、論文「ゴルドーニの演劇改革・ 同時代人の批評を通して」を起点として、大崎氏の研究の今後の展開が大いに期待される。

よって、審査委員会は、大崎論文が博士(文学)の学位に十分値するものとして、評価できるとの結論に達した。